

先週私たちは、エルサレムの指導者たちが、その会議において決定したことを手紙に記し、それをユダとシラスにもたせてアンテオケ教会に届けさせたことを見ました。手紙を読んだ人々は、その励ましによって喜んだというわけですが、そのようにして教会は、ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンとの間に起こった分裂の危機を逃れることができたのです。ところが、今度は、パウロとバルナバとの間に問題が生じます。それは、パウロがした、ある提案がきっかけでした。

36節「幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。『先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。』」。皆さんは、このパウロの言葉の中に、バルナバとの関係がこじれるような何か問題を見ますか？問題どころか、他の兄弟姉妹に対するパウロの愛が見られると思うのです。では、何が問題だったのか？

37-39節「ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った」。


パウロの提案にバルナバは同意します。ところが、そこで彼は、いとこのマルコも連れて行くことを願うのです。けれども、それにパウロは激しく反対しました。それは以前の宣教旅行の際に、マルコが途中で帰ってしまったからです。ですから、マルコを連れて行くかどうかで、二人の間に「激しい反目」が起こるのです。この「激しい反目」とは、英語 (ESV) では、“Sharp disagreement”と訳されていますが、「意見の相違、不一致」という意味です。その結果、二人は、それぞれ別行動を取るようになったといえます。

なぜパウロは、マルコを連れて行くことに、そこまで反対したのでしょうか？彼が言うように、確かにマルコは、キプロス島の後、パンフリヤで一行から離れました。その理由としては、キプロス島で、パウロがバルイエスの目を見えなくしたことに恐れを抱いたとか、パウロの教えに疑問をもったことなどが考えられます。または、バルナバの故郷キプロスに行くのは良くて、それ以外の地域に行くのには戸惑いを覚えたのかも知れません。それらとは全く関係なく、ただ自分の都合で、帰った可能性もあります。

いずれにしろ、マルコのことによってパウロとバルナバとの間に激しい反目が起こり、それが原因で、彼らが別行動を取るようになったわけですから、マルコに対するパウロの印象が良くなかったのは明らかです。そうすると、どうでしょう？私たちとしては、パウロとバルナバの関係が、この後もずっと良くなかったと考えるべきですか？彼らが仲直りしたことを明確に記す箇所はないと思うのですが、ただマルコに対するパウロの評価が、後に良くなっていることを彼の手紙から知ることができます。

パウロは、彼の最後の手紙と言われるテモテ第二の手紙でこう言っています。「マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです」(4:11)。パウロとバルナバが別行動を取った理由がマルコであったのですから、この言葉から、パウロとバルナバの関係も後に修復された、と推測することができます。彼らが死ぬまで、互いに憎み合ったという方が考え難いでしょう。

ただ、この時の意見の違いから、彼らが別行動を取ったのは事実で、すでに見たように、バルナバは、マルコを連れて船で自分の故郷、キプロス島に渡ります。そこにはパウロたちの宣教によって信仰に入った地方総督のセルギオ・パウロがいました。パウロについては、**40-41節**「パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。41 そして、シリアおよびキリキヤを通り、諸教会を力づけた」。

 地図を見て下さい。シリアとは、アンテオケがある地域のことです。そして、キリキヤは、パウロの出身地タルソのある所です。エルサレムでの迫害を逃れたパウロが、故郷タルソに行ったことは以前見ましたが、おそらく、その時に、彼の宣教を通して救われた人々が、教会を形成していたのでしょう。パウロとシラスは、それらの地域を通り、諸教会を力づけた後、以前の宣教地へと向かいます。

ここでパウロの選んだシラスについて少し触れておきたいと思います。先週の33節では、「彼らは、しばらく滞在した後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、彼らを送り出した人々のところへ帰って行った」とありました。でも、その数節後の36節では「幾日かたって後」、パウロはシラスを選んだというのです。

新改訳をお持ちの方は、「あれ？シラスは帰ったはずでは？」と疑問に思われるかも知れません。なぜなら、34節が抜けているからです。ただ口語訳では、34節として、括弧して〔しかし、シラスだけは、引きつづきとどまることにした〕となっていると思います。新改訳にも、注の欄に同じ内容のものが記されているはずですが、いずれにしろ、パウロがシラスを選んだ事実からして、彼は帰らずに、そこにとどまったようです。それゆえに、パウロとシラスは、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発することができました。

ここで彼らが二手に分かれたということは、普通なら、この後の記述が「バルナバ達の宣教」と「パウロ達の宣教」というように、両方記されるべきだと思うのです。でも、この後は、パウロ達の宣教のことが記されず。その理由についてはわかりませんが、この手紙の著者ルカが、この後、パウロたちの一行に加わるので、ルカからすると、自分が同行した旅について記するのが自然といえるでしょう。

16章 1-3節「それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、2 ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。3 パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みなが知っていたからである」。

ルステラがどのような町であったかを覚えてますか？そこは、パウロが石打ちにされ、ほぼ死にかかったところでした。その町に弟子のテモテがいたわけですが、パウロは、彼を同行させようとしています。もしここでの話が、テモテを連れて行くだけのことなら、そう難しくなかったことでしょう。ところが、パウロは、ここでテモテに割礼を受けさせるのです。そして、そのことが話を複雑にします。なぜなら、ついこの間、エルサレムで会議が行われ、使徒たちと長老たちとは、異邦人が救われるには、割礼や律法を守る必要はなく、ただ主の恵みにより、信仰によると正式に決めただけだったからです。

4節にもこう記されています。「さて、彼らは町々を巡回して、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を守らせようと、人々にそれを伝えた」と。パウロたちをして、その規定を伝えることが、旅の目的であったことは、はっきりしていました。では、なぜパウロは、テモテに割礼を受けさせたのか？それはテモテの救いのためですか？もう一度、3節「パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた」。その理由は、「ユダヤ人の手前」であったというのです。

皆さんは、そのことをどう理解しますか？パウロはユダヤ人たちを前に、福音の本質を曲げてしまったのでしょうか？福音の本質を証するには、むしろ、テモテには割礼を受けさせるべきではなかったと思わないですか？ここで私たちがミスしたくないのは、テモテはこの時すでに救われていた、つまり、弟子となっていた、ということです。それゆえに、この割礼は、テモテの救いのためではありませんでした。

ただ、ここにテモテについて書かれてあるように、彼の母（ユニケ）はユダヤ人ですが、彼の父親はギリシヤ人でした。テモテへの手紙からもわかるように、テモテは幼い頃から聖書に親しみ、その純粋な信仰は、まずその祖母（ロイス）や母に与えられました。そんなテモテですが、彼は「ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった」わけです。でも、それと共に、彼の父がギリシヤ人であることを、みなが知っていました。そのことのゆえに、テモテは、ユダヤ人たちに対して自由にみことばを語れなかったのです。

そこでパウロは、テモテの救いのためではなく、これからの福音宣教のため、つまり、「ユダヤ人の手前」としてのユダヤ人に対しても、また異邦人に対しても、何の妨げなしにテモテが福音を語るよう、彼に割礼を受けさせたのです。割礼自体は、もちろん、罪ではないので、パウロは、テモテのうちに教会の指導者としての将来性を見て、割礼を受けさせることを判断したと思われる。

この16章には、後にピリピでの出来事が記されています。そこでパウロたちが捕らえられた際に、パウロとシラスがローマ市民であることが明らかにされていますが、テモテも彼の父親がギリシャ人であったことからしてローマ市民であったはずですが、では、彼らの宣教は、異邦人だけに限られたものか？というところ、もちろん、そこにはユダヤ人たちも含まれていました。そのことから、パウロがテモテに割礼を受けさせたのが、福音のためであった、つまり、主イエスの救いがユダヤ人たちにも届けられるためであったといえます。

なぜ神様は、主を信じるすべての者に救いを、つまり、罪の赦しと永遠のいのちを恵みとして与えて下さるのでしょうか？なぜそれは私たちの努力や行いによるのではないのですか？もちろん、それは私たちが完全な者となれないからですが、もっと積極的な言い方をすれば、それは私たちが福音に生かされるためです。つまり、主イエスとその救いを喜ぶことで、私たちの歩みが、主の福音を中心としたものとなるためです。

どうぞ考えて見て下さい。なぜパウロは、以前、みことばを語った地域に再び出て行こうと言ったのですか？バルナバとパウロは、なぜ別行動を取ってまで、他の地域の兄弟たちの所へ出かけて行ったのでしょうか？パウロがテモテを連れて行こうとした理由、またテモテが、パウロに言われるまま、割礼を受けた理由は何ですか？彼自身のためですか？いいえ。それはすべて福音のため、彼らを通して主イエスの福音が語られることで、それを聞いて信じる人がみな、主の恵みによって救われるためです。

ですから、大事なことは、割礼を受けるか受けないかではありません。みことばを「してはいけない」とか「しないといけない」といって律法的、義務的に捉えることで、自由のない、喜びのない歩みをするのが、福音に生きることではないのです。むしろ、それはキリストの律法、つまり、愛によって生きることです。パウロは、ガラテヤ書でこのように記しています。ガラ5:6「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです」。ガラ6:15「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なことは新しい創造です」。

パウロは、テモテには割礼を受けさせました。でも、ギリシャ人のテトスには割礼を受けさせなかったのです。それは、福音が曲げられてしまうことだったからです。ですから、パウロの言うように。大事なことは、福音（主イエスの恵み）によって、新しく創造されること、それによって愛によって働く信仰に生きる者とされることです。パウロが、福音のためにテモテに割礼を受けさせたことは、ある意味で型破りのことでした。でも、主イエスが罪人である私たちを救うためにして下さったことは、そんなレベルではないのです。

主は、神の在り方を捨てて、人となって下さいましたが、それは実に主を愛する者ではなく、主に背を向ける罪人の私たちのためでした。主は、この世に来られ、罪人と交わり、食事を共にすることで、ご自分が罪人をあわれむ方であることを示されたのです。そして、そんな罪人を滅びから救い出すために、主はご自分のいのちをその贖いのための代価として差し出し、十字架にかかって死んで下さいました。そして、三日目に死人の中からよみがえられることで、ご自分を信じる者に、永遠のいのちを約束して下さいました。今日、私たちが、こんなにすばらしい救いに預かっているのは、主が私たちのために来て下さったからです。それが福音です。この主の福音を届けるために、私たちもともに労させていただけようではありませんか。